

## 展示紹介

## 捕物帳の作家たち／捕物作家クラブ展

影山 亮／丹羽 みさと

大衆文化研究センターでは、これまで研究の成果を旧江戸川乱歩邸にて展示という形で発表してきましたが、新型コロナウイルス感染症のため、二〇二〇年はネット上での開催となりました。

遠方の方々にもご自宅で乱歩について知っていただけるよい機会だということで、本稿では、WEB展示について観覧の手引きとなるような解説および展示の概要をお伝えいたします。

「捕物帳の作家たち／捕物作家クラブ」展は、捕物作家クラブの発足経緯や活動内容の面白さ、クラブ会員やその作品のバラエティ豊かな様相など、戦後に隆盛した「捕物帳」を軸とする社会現象を伝えることをねらいとして大きく四つのセクションから構成されています。

はじめに「捕物作家クラブと江戸川乱歩について」では、昭和二十二（一九四七）年七月七日のクラブ発足を軸

に、乱歩と同クラブとの関係を示しています。

時代を江戸に設定した、いわゆる「捕物帳」を書いたことがない乱歩が捕物作家クラブの設立に関わったのは、一種の反発心からでした。

昭和二十（一九五〇）年に探偵作家クラブが結成された際、捕物作家たちは会員の資格がないと除外されました。これは捕物帳が本格的な探偵小説ではなく、「変格探偵小説」であると見て軽視していた反対派の意見による決定でした。江戸時代の古典の取捨を通して捕物帳への理解を深めていた乱歩は、その決定に違和感を覚え、作家はもとより挿絵画家なども含めたジャンル横断的な捕物作家クラブの設立を企図しました。会長の野村胡堂、副会長の土師清二等の名前が表紙に記された会員住所録は、その特徴が一目にわかる資料です。

§1「山手樹一郎と『明朗闊達』な遠山の金さん」では、クラブ会員の

§1 山手樹一郎「ほりもの櫻」  
山手作品の署名入り短編集。表題作は「遠山の金さん」シリーズの一編。  
(昭和二十六年 東方社 個人蔵)



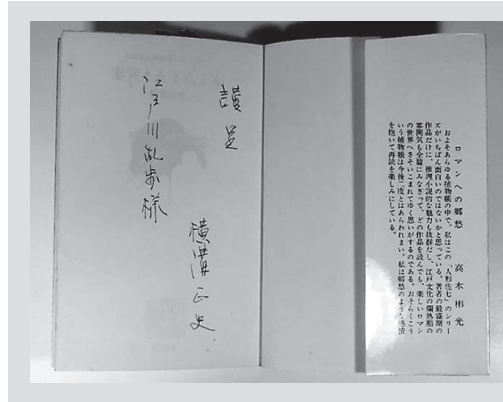
で、一番の売れっ子であった山手樹一郎を取り上げています。昭和十四（一九三九）年、「桃太郎侍」で注目を浴びたものの、その明朗闊達な筆致が当時の情勢にそぐわず、不遇を託っていました。しかし、戦後、チャンバラシーンが禁じられた占領下では、剣を振り回さない「夢介千両みやげ」や「遠山の金さん」シリーズで人気を博しました。シリーズ一作目の「ほりもの櫻」をタイトルにした署名入り単行本も現存しています。戦後の時代小説を牽引した山手は、昭和三十九（一九六四）年、改称した「日本作家クラブ」の会長に就任し、後進の育成に尽力しました。

§2「推理小説作家 横溝正史の捕

物帳」では、横溝の捕物小説「人形佐七シリーズ」執筆の背景や、岡本綺堂の『半七捕物帳』と映画「佐平次捕物帳」の登場人物から取った名前の由来などについて記しています。

シリーズ第一作目は「羽子板娘」（昭和十三（一九三八）年）ですが、これはアガサ・クリスティーの「ABC殺人事件」のトリックを借用したものでした。謎解きよりも「古き良き」江戸の情景を楽しむ綺堂作品とは異なり、この作品は金田一耕助という名探偵を生み出した横溝ならではの、探偵小説の要素の強い捕物小説になっています。乱歩所有の『春宵とんとんとん』は、横溝のサイン入り謹呈本です。

§2 横溝正史「春宵とんとんとん」  
 人形佐七全捕物帳シリーズ一冊目。  
 乱歩が最晩年に受け取った横溝正史のサイン入り謹呈本。  
 (昭和四十年 講談社  
 立教大学図書館蔵)



§3 「捕物作家クラブ会長 野村胡堂の交友」では、乱歩に頼まれ、同クラブの初代会長を引き受けた野村胡堂を取り上げています。胡堂は、寛永通宝を投げて悪人を成敗する銭形平次の生みの親として有名な作家であり、当時も大衆に人気のある作家でした。

雑誌『写真報知』の編集者だった頃、乱歩とは「臆無情」などの翻訳を手がけた黒岩涙香の「ファン」として意気

投合しました。同誌には、乱歩の「算盤が恋を語る話」「日記帳」が大正十四(一九二五)年四月が掲載されましたが、これはデビュー誌「新青年」以外で初めて取り上げられた作品となります。後年、乱歩は重複する涙香本を気前よく胡堂に贈り、胡堂はそのお返しとして乱歩が所有していなかった涙香本を探し出しました。その中の一つに写真の『捨小舟』があります。

§4 「ちよつと珍しい」捕物作家クラブの活動」では、表題通り、同クラブの様々な企画について触れています。

昭和二十四(一九五四)年には、浅草寺境内に発会記念として「半七記念碑」や三つ足の青蛙神像が建てられ、昭和二十七(一九五二)年には、浅草花月劇場で「第4回捕物まつり」が催されました。乱歩は探偵作家クラブ会長でしたが、捕物作家クラブのイベントにも積極的に参加しており、この捕物劇では遠山左衛門尉役となって出演しています。

これらの経費は、山手樹一郎や村上元三、長田幹彦などの会員がリレー形式で綴った小説「黒門町の伝七捕物帳」の売り上げや、会員の捕物小説集『捕

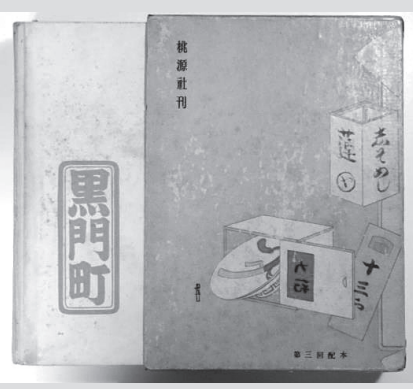
物絵図」、また雑誌「読切小説集臨時増刊号」等への出版斡旋手数料から補填していました。

捕物作家クラブは現在、日本作家クラブと改称しています。神田明神境内にある銭形平次の石碑には、発起人として捕物作家クラブ会員だった山手樹一郎や城昌幸などの名前も刻まれています。

影山亮(さいたま文学館学芸員)  
 丹羽みさと(立教大学)



§3 黒岩涙香「捨小舟」  
 胡堂が神保町の古書店から探し出し、乱歩へ贈った黒岩涙香本のひとつ。  
 (明治二十八年 扶桑堂  
 立教大学図書館蔵)



§4 山手樹一郎他「黒門町傳七捕物百話」  
 昭和二十六年三月〜三十五年十月「京都新聞」に連載された作品。捕物作家クラブ会員がリレー形式で書き連ねていった作品。  
 (昭和二十九年 桃源社 個人蔵)